



Title	〔資料紹介〕慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 1994, 16, p. 1-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67357">https://doi.org/10.18910/67357</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔資料紹介〕

## 慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』

山崎 淳

凡例

- 一、本文は慶応義塾大学附属図書館蔵「西行繪詞」を底本として、正確に翻刻することにつとめた。
- 一、和歌は二字下げとし、上に歌番号を施した(126は一二六番歌を、1822は一八二三番歌を示す)。猶、一四番歌、二三番歌、七四番歌の次の和歌は異本による注記なので歌番号は付していない。
- 一、「しかく」の絵有之」等の絵の注記は四字下げとした。
- 一、底本の頭書は「頭注」として、できるかぎり底本での位置の近くに挙げた。
- 一、見せ消・抹消・補入等、底本における訂正は改めずそのまま翻刻した。
- 一、句読点は私に施した。
- 一、絵の注記の後に校異を挙げた(注記の後に挙げなかった箇所も一部ある)。仮名遣い・漢字の用字の違い、「む」と

- 一、「ん」、「もて」と「もつて」、「世中」と「世の中」、「被召て」と「召されて」、「殊」と「殊に」、「誠」と「誠に」、「泣ければ」と「なきければ」のような異同は原則としてとっていない。また底本において見せ消・抹消による訂正がある場合、消された文字に異同があっても細字が他本と一致すれば校異として挙げていない。
- 一、校異に用いた伝本の略称は次の通りである。

(国)―国立国会図書館蔵本

(京)―京都大学文学部国文科研究室蔵本

(岩)―岩国徴古館蔵本

このうち国立国会図書館蔵本には朱での傍訓が多いが、特に問題にならない限り校異としては挙げなかった。また朱での見せ消は無視した。

web公開に際し、翻刻は省略しました

## 解題

はじめに

「西行物語」には「西行繪詞」と題されるものがある。現在、慶応義塾大学附属図書館蔵本（以下、慶大本）、国立国会図書館蔵本（国会本）、京都大学文学部国文科研究室蔵本（京大本）、岩国徴古館蔵本（岩国本）の四本が確認されており、広本系、略本系、采女本系、永正本系に分類される「西行物語」の中では（一）、永正本系に属する。この伝本については、既に秋谷治氏が「寛永本『西行物語』考―『西行物語』原型を探る―」（「一橋論叢」86―5 昭和56・11）という論考を発表されており（以下、秋谷氏に従い「西行繪詞」を寛永本と呼ぶ）、氏は寛永本を、書写年代は近世まで下りながらも、成立は永正本の書写された永正六（一五〇六）年以前であるとされ、なおかつ「西行物語」原態を考える上で重要な伝本と位置付けられた。しかし寛永本本文は未紹介なので、今回、慶大本の翻刻、解題をさせていただくことにした。

一

慶大本の簡略な書誌を記すと次のようになる。請求番号一四

一・九三・一。寸法、縦28・7センチ、横20・2センチ。外題「西行繪詞」（題簽）、内題「西行繪詞」。墨付四十二丁（西行繪詞分のみ、合冊された「伊香保日記」を含むと全七十三丁、前後に遊紙二丁ずつ）、一面十行書き。所々に略本系による異本注記あり。漢字の訓みと和歌右上の「新古」「千載」等の注記は朱で施されている。

奥書から、桑名藩に仕えた近世初期の儒学者、三宅澹庵により寛永十七年（一六四〇）四月下旬に書写されたこと、西行の歌集や「千載集」等により頭書、異同を加えたことがわかる。最後の絵の注記の後に記される部分も含めて奥書を見ると、

A 此繪詞、山家集にかうがへあはずれば、や、ことたがひたるやうにおほゆる事もはべれど、安嘉門院四条がかける不知霄日記に、天龍の渡といふ舟にのるに、西行がむかしも思ひ出られていと心ほそしといへるは、此詞をおもへるなるべし。されば、はやくよりつたはりけるものなりと、見る人信をとるべきにこそ。（濁点は私、以下同じ）

B 寛永庚辰之夏、卯花月下流、一覽之次、令侍史寫留焉畢。且考家集并千載集等、加頭書、以聊辨異同云。

澹菴子柔（花押）

C 詳考此詞、西行行狀、更無次第。唯採所詠之哥、牽強附會以爲說耳。若夫供佛櫻花之詠、既載千載集、何爲臨終之哥哉。如此之類、比々皆是然。亦其中不無實事、唯云不可尽信焉而已。

とあり、特にCが次の「澹庵歌話」と多く重なる(2)。

又、大ニイブカシミオモヘルコトハ、西行ノ事、因説シタル絵詞ト云モノニ、建久九年二月十五日朝、往生ヲ遂ニケリトカキタレド、此絵詞ハ、山家集ナドニモマ、タガヒタルコトオホカリ。タゞ西行所詠之歌ヲ採テ、牽強付合シテ作りナセリトミエタレバ、其中マコトナルコトモナキニハアラザナレド、尽ニシモウケナヒガタシ。

この部分に続いて「澹庵歌話」では、

慈鎮和尚拾玉集云、文治六年二月十六日未時、円位上人入滅、臨終ナド誠ニメデタク、存生ニフルマヒオモハラレタリシニ更ニタガハズ、世ノ末ニアリガタキヨシ申アヒケリ、其後、ヨミヲキタリシ歌ドモ思ヒツヅケテ、寂蓮入道ノモトヘ申侍シ、

一 君ヤシル其二月ト云置テ詞ニ負ヘル人ノ後ノ世

一 風ニ靡ク富士ノ煙ニタグヒニシ人ノ行エハ空ニシラレテ  
チハヤブル神ニ手向ル藻塩草カキアツメツ、見ルゾ悲キ  
是ハ、願クハ花ノ下ニテワレ死ナン其キサラギノモチツキ  
ノ比 トヨミオキテ、ソレニタガハヌ事ヲ、世ニモアハレ  
ガリケリ、又、風ニナビクフジノ煙ノソラニ消エテユクエ  
モシラヌワガ思ヒ哉 モ此二三年ノ程ニヨミタリ、是ヲワ  
ガ第一ノ自嘆歌ト申シコトヲ思フナルベシ、又諸社十二卷  
ノ歌合、大神宮ニマイラセント營シヲ、又採テ沙汰シ侍キ、  
外宮ノハ一筆ニカキテ、既ニ見セ申テキ、内宮ノハ、時ノ

手書トモニカ、セントテ、料紙ナド沙汰スルコトヲ思ヒテ、  
三首ヨメルナリ。定家卿拾遺愚草云、建久元年二月十六日、  
西行上人身マカリニケルヲ、終リ乱ザリケルヨシヲ聞テ、  
三位中將ノモトヘ、

望月ノ比ハタガハヌ空ナレド消ケン雲ノユクヘカナシナ  
上人先年詠云、ネガハクハ花ノ下ニテ春シナン云々。今年  
十六日望月也、返シ、三位中將

紫ノ色トキクニゾナグサムルキエケン雲ハカナシケレド  
モ 今考、文治六年四月十一日改元、為建久元年ト。

今年二月大也。月大ナレバ十六日望ニシテ、月小ナレバ十  
五日望也。拾玉ニハ改元以前ノ年号ヲカ、レ、愚草ニハ改  
元以後ノ年号ヲ載ラレタリ。

となっており、これは頭注⑩とほぼ同文である。Aは定かでないが、Cや頭書は澹庵自身によるものとみてよいだろう。

国会本、京大本と比較した時、慶大本が善本であると認められるのは、秋谷氏の指摘通りである。国会本と京大本の相違は、頭書が前者にはあり、後者にはないことだが、慶大本との異同に一致が多いこと、特にCを同じ所から欠くことから二本は近い関係にあるといえる。慶大本は二本の親本の如き位置にあるのだろう。また京大本は22番歌から39番歌にのみ「新古今」「千載集」の注記があるという不自然さを持ち、親本の頭書を殆ど無視して書写されたと考えられる。岩国会本は京大本と同様頭書がなく、さらにABCも欠いているので、寛永本原形に近

いとみることもできるが、大きな脱文(十九頁参照)や、意味をよく理解しないまま書写している箇所がある。やはり四本の中では慶大本が最善本といえそうである。

## 二

秋谷論文で指摘されたように、寛永本と永正本を比較すると、寛永本本文の先行することがわかる。以下、秋谷氏の触れられなかった箇所を数例挙げてそのことを確認してみたい。

まず西行が武蔵野で会った隠者の庵の描写は、寛永本では次のようになっている。

…恋しき草の色なれば、紫の草のゆかりもなつかしく、晝よりも心のすみければ、尾花葛原分入て、かたぶく月に付ても都の方を打詠て、心をすまして有けるに、(中略)萩、女郎花などあだに折かけたる庵に、齡七十斗なる老僧の一人有けり。仙人などの栖やらんと覺て立出て、いかなる人にて是程の野中に、只一人角てはおはしますぞと問ば、(中略)薄、荊薹をのれとかこふ住居にて年月をへぬる也と答ければ、…

『西行物語』諸本では、傍線を付した植物はどのような並びになっているのだろうか(3)。以下に列挙してみる。

・萩、萩、をみなめしをかこひにはして、すゝき、かるかやをうまにはふきて(文明本)

・わづかなるいほりのうへをば、すゝき、かるかやにてふき、萩、女郎花、色々の秋の草にてめぐりをかこひ(久保家本)  
・あたりには、きゝやう、かるかや、女良花、しをん、りんだう、我もかうなどいふ、秋の草を、いほりかけて(永正本・「室町時代物語大成」五)

寛永本は「薄、荊薹」が隠者の言葉に取り込まれているとはいえず、原態に最も近いとされる広本系(文明本)の順序を踏襲している。略本系の久保家本にしても、広本系の本文を並び変えたりにすぎない。ところが永正本の場合、広略いずれの本文からも直接出てこないような並びとなっている。この永正本の並びは、「浄瑠璃御前物語」に、

百しゆのはなの、なかよりも、ききやう、かるかや、をみなめし、しおん、りんだう、われもつかう…(四段 せんすいそろえ・「室町時代物語大成」七)

という同一のものを見出せる。『秋月物語』にも同じ並びがあり、おそらくこれは草花の名を列記する時のイデオマティックな表現であったのだろう。永正本はそのような表現を用いて改変されたと考えられる。

次に挙げる表現は、永正本系のみに見えるものである。

・せきせうが谷の金も命に替る事なく、とうれいが銅も冥土のためによしなし。漢王の三尺の劔も閻魔の使を切事なく、秦王の一面の鏡も有為の宝にはならず。(寛)  
・いかゞせきけうが谷の金も、命をかふ、ちからなければ、

冥途のためには、ようなし。かんわうの、三尺の劔も、魔の使をきる事なし。始皇が一面の鏡も、りんじゆの影を、うつす事はなし。(永)

傍線部は、頭注⑩にあるように「石崇金谷・鄧通銅山」という中国の故事であろう。後に続く漢の高祖、秦の始皇帝の故事が

対句になっているので、永正本に「鄧通銅山」の脱落があると考えるべきであり、寛永本で補い得る部分である。

ただし右の二例は、たまたま寛永本に元の形が残ったに過ぎないとすることもできよう。そこで西行が吉野、熊野の旅から帰京した際に詠んだ十首歌の配列を見ることにする(4)。

永正本	寛永本	文明本
<p>其後、わしの山の、月をながめて、 十首の哥をぞ、よみにける。 A 面影のわすられまじき我身かな 名残を人の月にとゞめて B こん世にも心のうちにあらはさん やがて入ぬる月のひかりを C 月見ばと契りをきてしふる里の 人もやこよひ袖ぬらすらん D たち出て雲間をわけし月影も またぬけしきぞ空に見えける E 山陰にすます心のいかなれば F 夜もすがら月こそ袖に宿りけれ おしまれて入月もあるらん I 思ひきや雲井のよその月影を こけの袂にやどすべしとは O 深にけるうき身の影をおもふまに はるかに月のかたぶきにける</p>	<p>されば常には驚の御山の月影を詠つ、 十首哥をぞ調ける。 A 面影のわすらるまじき別説 名残を人の月にとゞめて B こん世にも心の内にあらはさん あかで入ぬる月のひかりを C 月見ばと契をきてし古郷の 人もや今宵袖ぬらすらん D 立出て雲間を分し月影を 待ぬけしきや空に見えけん E 山陰にすまぬ心はいかなれや F 夜もすがら月こそ袖にやどりけれ おしまれて入月も有けり G 昔の秋を思ひ出れば H 捨とならば浮世をいとふしるし有ら ん 我見ば曇れ秋の夜の月 I 暗なる跡の身をいかにせん H 月の入山に心をくり入て I 霜さゆる夜半の木の葉をふみ分て J 月を見るやと問人もなし J くまもなきおりしも人を思ひ出て 心と月をやつしつる哉</p>	<p>仁和寺の御室よりめされてまいりけるに、 願難禰土次第、有為無常のことはり、 成仏得道のいんゑん、往生極楽のことはり、 こまかにめしとはせたまひて後、 やまとこと葉をくちにすさむること、 たゞ聖人ばかりなり。同はちすにうまれんために、 月の百首をよまんとおもふなり。 けちゑん申べきよしおほせられければ、 十首のうたをよみてまいらせけり。 a うれしやとまつ人ごとにおもふらん 山の葉いづる秋のよの月 H 月のすむ山に心をおくりいれて やみになるあとの身をおくりいせむ F 夜もすがら月こそ袖にやどりけれ むかしのあとをおもひいづれば O ふけにけり我身のかげをおもふまに 春かに月のかたむきははれにけり b 月をまつたかねの雲ははれにけり こゝろあるべきはつしぐれかな c 月のみやうはのそらなるながめにて おもひもいではこゝろかよはむ</p>
<p>(室町時代物語大成の翻刻では、和歌の各句に読点が付されているが、この表では省いた)</p>		

	<p>さても仁和寺の御室より被召て仰に云      厭離穢土欣求淨土の次第、成仏得道の      心を願するに、百首結縁すべきよし、      仰の有ければ、十首まいらせれる中に      Kこし方の見しよの夢にかはらぬは      いふもうつゝの心やはする      Lうけ難人のすがたに生れ出て      こりずや誰も又沈べき      M世をいとふ名をだにもさはとゝめ置      て 数ならぬ身の思出にせん      N浮身こそいとひながらも哀なれ      O更にける我身の影を思間に      はるかに月のかたぶきにけり</p>
<p>Gすつとならばうき世をいとふしるし      あらん われにはくもれあきのよの      月      dかくれなくもにすむゝしは見ゆれど      も 我からくもる秋のよの月      eありあけはおもひであれやよこ雲の      たゞよはれつるしのゝべの空      fしたはるゝこゝろや行と山の業に      しばしなிரりそ秋のよの月</p>	

仁和寺の御室の要請で十首歌を詠んだという広本系の設定は、寛永本では受け継がれているが、永正本ではなくなっている。永正本の「わしの山の月」を詠んだという設定は、広本系との間に寛永本の存在を置かなければ説明できない。また寛永本の和歌に広本系、永正本両方に共通するものがあるのに対し、広本系、永正本のみが共有する和歌のないことも、広本系↓寛永本↓永正本という先後関係を強く保証している。永正本は、広本系では一つであった十首歌を無理に二つにしてしまった感のある寛永本の形を、再び一つにまとめようとしたのであろう。

以上の例からみても、寛永本が永正本に先行するという秋谷説はほぼ動かないことと思われる。永正本系を検討する際には、

まず寛永本を念頭に置かねばならないのである。

三

前節では、永正本が後出本文であり、寛永本を介さねば説明できない、あるいは寛永本によって補い得る箇所のあることを確認した。しかし寛永本が独自に増補した部分、永正本の方が元の形を残している部分も視野に入れる必要がある。以下、そのような箇所を挙げてみる（いずれも永正本系の独自要素）。

- ・高も賤も、子を思道に迷いぬ人は無ならひぞかし。古も我子を奈良の里に置いて、今夜の月を俤に立て、心は暗にあら

ねども子を思ふ道にと詠て、小篠原風待露の消やらで此一  
ふしを思置、位山の跡を尋てのぼれ共子を思道など申置た  
り。(寛)

・高きも、賤も、子をおもふ道に、まよはぬ物は、なきぞか  
し。されば、昔も、さるためし、ありてこそ、此哥はよま  
れけめ。

人のおやの、心はやみに、あらねども、子をおもふ道に  
まよひぬる哉(永)

「人の親の…」の和歌は、寛永本ではその一部、永正本では一  
首そのまま引用されている。これが「後撰集」や「大和物語」  
に載る、藤原兼輔の有名な一首であることはいうまでもない。

「西行物語」では娘を突き放し出家遁世する場面に引かれるの  
で、この和歌が使われることは不自然ではない。ここで注目し  
たいのは波線部である。この「子を奈良に置いて詠んだ」とい  
う要素は、「後撰集」「大和物語」にはなく、続く「小篠原…」

「位山の…」の原拠である「新古今集」の、  
・をささ原風まつ露の消えやらすこのひとふしを思ひおくか  
な(巻第十八・雑歌下・1822・皇太后宮大夫俊成)

・くらら山あとをたづねてのぼれどもを思ふみちに猶まよ  
ひぬる(同・1814・土御門内大臣)

の詞書にも見当たらない。現在、寛永本と重なることを確認し  
得たのは「沙石集」巻第五末第九話「哀傷歌ノ事」の、

一 昔或人モ、子ヲ奈良ノ都ニヲキテ

人ノヲヤノ心ハヤミニアラネドモ 子ヲ思フ道ニマヨイ  
ヌルカナ

トヨミ、

一 或人ハ、病ヲモリテ、カギリナリケルニ、

ヲザ、ワラ風待ツ露ノキヘヤラデ 子ノ一フシヲ思ヒオ  
クカナ(岩波古典文学大系)

であるが、これは「沙石集」でも梵舜本のみに見える説話であ  
り、また寛永本の他の部分に「沙石集」が使われている形跡は  
なく、両者に関係があるとはいえないようである。しかし「沙  
石集」の如き説話を永正本に重ねれば、寛永本文を作ること  
は可能なので、この部分は寛永本での増補といつてよいだろう。  
次の例は、一度目の帰京において、西行が同行の西住を絶縁  
する際に語ったものである。

・胡馬北風にいばえ、越鳥南枝に巢をくふと云へり。鳥獸に  
至るまでも、旧里を恋る思あり。こゝをもつて東平我墓の  
上の草は西になびき、西方覚王の慈悲は東にかぶらしめた  
る。是皆くわいもつに至るまで故郷を忍ぶ謂に、我朝の西  
信阿闍梨は、やむことなき聖人也。学問の為に大唐に渡り、  
六年まで日本の事を不聞待りけるに、思ひがけず聖教の中  
より旧里にて持たりし扇を見出して、顔に押当て聲もおし  
まず泣給ひける。(寛)

・胡馬、北風にいばへ、越鳥、南枝にすをくう、といふ事あ  
り。かゝる鳥けだ物に、いたるまで、故郷をしのぶ思ひあ

り。このゆへに、東平王の草の墓は、西へなびく、西光王の慈悲は、ひがしに、かうぶらしめたり。(永)

「東平」とは後漢の東平思王のことであり、その墓の上の松が都の方に靡いたという故事は、『文選』李善注に記されている。

「西方覚王」は、「覚王」が仏の尊称であり、「慈悲は東にかぶらしめたり」と語られていることからすると阿弥陀如来を指すのであろうか。永正本の「西光王」という名称が他書に見えないので、寛永本の方が本来的なのかもしれない。これに続く寛永本の西信阿闍梨の説話は、現在他に同話や類話を見出せない。東平が中国、西方覚王が天竺のこととすれば、三国の体裁を繕うために語られていることになるが、既に東西で対句になっている表現の後では蛇足の感を免れない。やはりこの説話も寛永本で付加されたものであろう。

逆に寛永本で削除、あるいは脱落があったと考えられる箇所もある。

・あるじなく成ける泉をつたへて居たる人のもとに、行てあそびけるに、住馴し人の面影も水にうかびて見ゆることもなかりければ、馴し姿を思ひ出られて、三伏の夏は此泉に向てつくくと諸法の観念をせしか共、三途八難の炎にむせばん時は涼しき泉もあらじかしと覚て、生死無常は何事も角ぞかしと覚し。(寛)

・又、昔のあるじ、なくなりたる泉を、つたへていたる人のもとに行て、あそびけるに、哀あり。すみ馴し人の面影の

水にうつり、とゞまりて、見ゆる事の、なかりけるにも、たゞ生死無常は、何事も、かくぞかしと思に、いとゞ物うくて、ふるき思ひといふ題をもて、か様にぞ、

すむ人の、心くまる、泉かな、むかしをいまは、思ひ出つ。(永)

「すむ人の」の和歌が一見永正本の独自要素のようであるが、傍線で示した部分は重なっている。ここは『西行上人集』の、

主なく成たりし泉をつたへるたりし人のもとにまかりたりしに、対泉懐旧といふことをよみ侍しに

すむ人の心くまる、泉かな昔をいかに思ひいづらん(501)のように和歌のある方が本来的と見るべきである。従って永正本にも寛永本を補い得る部分が存し、二本は補完し合う関係にあることがわかる。これは二本に親子関係はないが、共通母胎といえる本の存在したことを示唆している。

右の三例以外の永正本系の独自要素の中には、簡単に元の形を想像できないものもある。

・佛の被仰たるは、縦戒を破僧成共、けさを掛たらんを打な

やまさんは、三世諸佛の真実の御身より血をあやし、一切

の天人の眼をくじる也と経には説て侍り。されば破戒無慚

の僧成共、打なやますべからず。次第天衆を初て、三宝皆

捨給はぬ物也。天台大師の摩訶止観には、出家は破戒共、在家の持戒には勝たりとこそ侍れ。僧儀律にも、若人百千歳阿羅漢を供養せんよりも、出家の功德には不及と云。経

には七宝の財をもて高き三十三天に至まで立たらんにも、出家の功德には不及と説かれたれ。(寛)

・佛のせちには、たとひ戒をやぶりたる僧なりとも、袈裟をかくる程の物を、なやますは、三世の諸佛の御身より血をあやしたる物なり、とまさしく経にも、説れたり。されば、破戒無慙の僧也とも、あやまつべからず。四大天王をはじめ奉りて、三宝は、出家の物を、善哉なり、とほめ給ふ。

天台大師、弘法も、百千僧を供養せん功德も、又、阿育大王の、八万四千の石の塔を、立給ふ利益も、いかでか出家の功德には、まさるべきとこそ、おほせられたれ。(永)

こゝは永正本系において、特に仏教色の濃い部分である。寛永本で原拠を確認すると以下のようになる(5)。①の「縦戒をくくじる也」は、『大方等大集経』巻第五十三の、

若復出家不持戒者。有以非法而作惱乱罵毀咎。以手刀杖打縛斫截。若奪衣鉢及奪種種資生具者。是人則壞三世諸仏眞実報身。則挑一切天人眼目。

による。「諸経要集」巻第二や「法苑珠林」巻第十九にも見える文言である。②の「天台大師の勝たり」は、『摩訶止観輔行傳弘決』二之五の、

出家破戒猶勝在家持戒。以在家戒不為解脱。

③の「僧儀律にも不及」は、『摩訶僧儀律』巻第二十九の、

若人百千歳 供養百羅漢 不如一夜中 出家修梵行 緣此之福祚 得離於六百 六千六十歳 三塗之苦惱

④の「七宝の財を不及」は、『賢愚経』巻第四、

仮使有<sub>レ</sub>人。起<sub>二</sub>七宝塔<sub>一</sub>。高至三十三天。所得功德。不如<sub>二</sub>出家<sub>一</sub>。

による。寛永本はほぼ経文で構成されているのである。ただし「経には」となっていたり、「摩訶止観には」「僧儀律にも」と出典を明記したりするものの、果たしてこれらが直接經典から集成されたかは存疑である。例えば延慶本「平家物語」巻第五末「惟盛身投給事」にも、

出家ノ功德ハ莫<sub>レ</sub>太ナレバ、前世ノ罪業悉ク滅給ヌラム。百千歳之間、百羅漢ヲ供養スルモ、不及<sub>二</sub>一日出家ノ功德<sub>一</sub>。出設有<sub>レ</sub>人<sub>二</sub>七宝ノ塔ヲ建<sub>レ</sub>ン事、高サ三十三天ニ至ルトモ、出

家ノ功德ニハ及バジ(勉誠社刊 延慶本平家物語)

という併記が認められるからである。「摩訶僧儀律」を原拠とする文言が原典よりも「平家物語」に近いことは、孫引きの可能性を示唆しているといえよう。

永正本は後半が相違する。⑥の阿育王説話が諸書に見えるものであるのに対し、⑤の「天台大師」は、今の所「法花直談私類聚抄」巻七、妙音品「十方枝葉事」の(6)、

天台大師隋<sub>レ</sub>皇帝<sub>ノ</sub>御時、十<sub>レ</sub>万僧供養<sub>ノ</sub>導師成<sub>リ</sub>。其時枝葉奏也。時文帝名聞<sub>ノ</sub>思<sub>レ</sub>成<sub>下</sub>。...

くらしいか類似のものを見出せない(弘法大師に関して右の要素を持つ説話は未見)。これは「隋天台智者大師別伝」等の、

以今開皇十一年十一月二十三日。於總管金城殿設千僧會。

が源泉なのだろうか。寛永本、永正本に「天台大師」「百千」「供養」の重なりがあることから、どちらかが元の形であったことは推測できるが、即断はできない。

ともかく寛永本成立の方が確実に早いとしても、二本は相補うものとみななければならない。永正本系本文は、寛永本を中心据えるべきだが、その際には永正本による絶えざる照射が必要である。

四

『西行物語』の中で和歌を無視することはできない。寛永本で百四十首、永正本で百九首と、広本系の約二百首からは量的に後退するものの、増補された和歌は略本系や采女本系よりも多い。広本系に見えない寛永本和歌は他出を全て確認出来るので、それらの他集への入集状況をまとめると次のようになる。

新古	千載	山家	上人	心中	御合	御合	宮合	追而	備考
20 おしむともおしみはつべき此世かは身を捨てこそ身をば助けめ								637	玉葉集2467、万代集3723
28 しらぬまに花をや人の折つらん枝をかぞえて鶯ぞなく		565	307	275			49		治承三十六人歌合189 御裳濯65
30 吉野山麓にふらぬ雪ならば花かとみてや尋いらまし	69	64	50	7	5				永、続千載集671
33 をしなべて花の盛に成にけり山の端ごとにかゝるしら雲		1066	76	53	10	15			永、御裳濯104、定家八代抄100、三百六十首和歌52
35 花にそむ心のかいで残らん捨はてゝきとおもふ我身を		1023		537		14			永、月詣集138、御裳濯131
58 こん世にも心の内にあらはさんあかで入ぬる月のひかりを		1009	521	282	263	43			永、御裳濯435、定家八代抄1609
65 霜さゆる夜半の木の葉をふみ分て月は見ると問人もなし		761							定家八代抄1712
67 こし方の見しよの夢にかはらぬはいふもうつゝの心やはする									一生誣草紙にあり 他本なし



※新古今集、千載集、山家集、上人西行上人集、心中山家心中集、御合—御裳渥河歌合、宮合—宮河歌合、追而—李花亭文庫本「西行上人集」の追而加書、永—永正本御裳渥—御裳渥和歌集（聞書集、殘集には重なる和歌がないので、この表からは除外した）

この表を見て気付くのは、勅撰集では「千載集」との重なりが多いことである。「千載集」所収の西行歌は十九首、そのうち十三首が寛永本と重なるが、既に二首は広本系にある。その二首を除いた十一首の中にも略本系に二首、采女本系に二首の共通歌があるので（備考欄参照）、「千載集」歌と重なる寛永本独自歌（永正本と重なるものを含む）は七首ということになる。

この「千載集」との重なりでは、122と124（以下、歌番号は特に断らない限り寛永本のもの）が配列も近似している。寛永本によるとこれらの和歌は西任の臨終に際し詠まれたとなっている。各歌集の詞書を見ると、122、124とも「西任」とするのは「千載集」であり、「西行上人集」では124のみに「西行上人」と記される。「山家集」「山家心中集」ではどちらの詞書とも「同行に侍ける（し）上人」となっており、ここから「千載集」との近さが指摘できる。ただし略本系の西行上人発心記のように、久保家本では「同行」だった人物を西任に比定してしまう例もあり、短絡的に寛永本が「千載集」を利用したとはいえない。しかも配列が122から125までも近似する『定家八代抄』のような存在もあり、やはり「千載集」との關係は慎重にならざるを得ない。寛永本がこれらの歌集のうちどれかを利用したとは思われるが、それを絞り込むことは難しい。

では他の歌集で寛永本での利用を確認できるものはないのだろうか。この点で注目されるのが、東国で詠まれた89である。

同歌の載る「西行上人集」「山家心中集」とともに挙げてみる。

（寛）世中に大事出来て、新院あらぬ様にならせおはしまして

後、かの事に寄て、奈良の大衆、餘多陸奥国に流されたりけるが、中そんと申所に、彼人々に行合て都の物語をすれば、涙を流して、さても有ければ、角行合奉りぬることぞ有難候へ。命のあらば物語とをつ國にして思を述と云題にて讀ける中に、

泪をば衣川にぞながしける舊き都を思ひ出つ、

（上）奈良の僧、とがのことによりて、あまた陸奥国へつかはされしに、中尊と申所にまかりあひて、都の物語すれば、涙ながす、いと哀なり、かゝることはかたきことなり、命あらば物がたりにもせんと申て、遠国述懐と申ことをよみ侍しに

涙をば衣川にぞながしけるふるきみやこをおもひ出つ、

（心）ならのそう、とがのことによりてあまたみちのくにへつかはされたりしに、中尊と申と申ところまかりあひて、宮このものがたりすれば、涙ながす、あはれなり、かゝる事はありがたきことなり、いのちあらばものがたり

もせんと申て、思のぶべきよしをのく申侍て、遠因述懐といふ事をよみはべりし

涙をばころもがはにぞながしつるふるき宮を思いてつ、秋谷氏はこの和歌を『異本山家集』、つまり『西行上人集』からの増補とみておられるが、三本を比較しても『西行上人集』『山家心中集』いずれを使ったのかは決定できない。ところが寛永本の独自要素である「世中に大事……」云々という文言は、『山家心中集』において「涙をば……」の和歌の前にある、

世の中に大事いできて、新院あらぬさまにならせをはしまして、おんぐしおろして、にわじにをはしますとき、て、まいりて兼賢あざりにあひて、月あかく侍しかばかゝる世にかけもかはらずむ月をみるわが身さへうらめしきかな

の傍線部と重なるのである。どうやら寛永本は、『山家心中集』の傍線部を次の和歌の詞書と結合させたらしい。広本系では右の詞書と和歌は、西行が四国に渡る前の場面として取り込まれているが、寛永本はその場面とは無関係に詞書を利用して、『山家心中集』が寛永本の増補に関わっていることは確実であろう。しかしながら右のような例は他には認められず、『山家心中集』にない寛永本独自歌もあるので、『山家心中集』の利用に関しては部分的増補としかいえないようである。

和歌に関しても一つ気付いたことに触れておきたい。寛永本独自歌はその殆どが西行歌であることを確認できるが、28だけ

は他人詠を西行のものとしてしまっている。他出の「治承三十六人歌合」『御裳濯和歌集』によれば、この和歌は空仁の詠であることがわかる。空仁は『千載集』に四首入集の勅撰歌人であり、窪田章一郎氏(7)や桑原博史氏(8)により西行の生き方に影響を与えた人物としての位置付けもなされている。寛永本に28が取り込まれたのはその辺りと関係があるのだろうか。ここで注意されるのが『御裳濯和歌集』である。そこで28は、

(題不知)

西行法師

色にしみかもなつかしき梅がえにをりしもあれや鶯のこゑ

梅花に鶯のなくをききてよめる

空仁法師

しらぬまに花をや人のをりつらんえだをかぞへてうぐひすのなく

と西行歌の直後にあり、しかも両歌は梅・鶯という素材が共通する。寛永本では他に『御裳濯和歌集』と三首が重なるが、それらは他集とも重なるので直ちに出版を決定できないものの、28の存在は『御裳濯和歌集』が無視できないものであることを物語っている。

以上、寛永本独自歌について気付いたことを述べてみた。そこには広本系における『新古今集』のような組織的利用(9)ははっきりと見出せない。やはり部分的増補としかいえないようがないのである。また全ての和歌を網羅したわけではないし、独自歌が皆同じ時期に増補されたという保証もない。今後は略本系や采女本系との関係も視野に入れつつ寛永本、永正本を検討

してゆくことが課題となるだろう。

## 五

最後に広本系から寛永本がどのように作られたのかを見ることにする。寛永本（以下、永正本系は寛永本で代表させる）が本文だけでなく、構成をも変えていることは既に指摘されている。広本系、略本系では娘の出家が四国の旅の後にあるのに対し、寛永本では前に位置するのである。つまり場面が移し変えられているのだが、このような移し変えが寛永本における改変の一手法であることを指摘しておきたい。

広本系の三番歌「なにごとにとまるころのありければさらにも又世のいとほしき」は、寛永本の38に当たる。広本系では在俗時の西行が出家への心情を吐露する際の詠、寛永本では熊野の旅の冒頭での詠として配されている。寛永本は広本系の和歌配列を多く踏襲しているのだが、ここでは大きくずれている。これは和歌ではなく、直前の文言が原因となっているのである。文明本によりその部分を挙げる。

妻子珍宝及王位 臨命終時不隨者 唯戒及施不放逸 今世後世為伴侶

と心にかけて、花山の法王は、このものゆへにこそ十善のくらいをすて、きの国千里のはまにおもむきて、なちのお山におこなひて、おはりにつゝに仏道にいらせ給ひけ

り。ぼんなうのくもあつく、名利の家の犬うてども出やらず、因果のひやくかうはくらくして、まねけどもきたりがたし。とめるをきくはうらやみ、まずしきを見てはあざけり、夢のうちのたのしみ、浪のうへの月、しづまりがたき心のみして、蛭蟻の虫のあしたにうまれてゆふべにしする、猶憑あり。いづるいきは入いきをまたずして、命をとちぬ。五よくのきづなにひかれて、つるにならぬのそにしづむ事を、（中略）このたびいとはずは、たうらいのかなしみなり。（中略）

いつなげきいとおもふべきことなれば 後の世しらで人のすぐらん

いつの世にながきねぶりの夢さめて おどろく事のあらんとすらん

なにごとにとまるころのありければ さらにしも又世のいとほしき

寛永本に「いつなげき」「いつの世に」の和歌はないが、他はほぼ同文である。寛永本でのこの部分の熊野への移し変えは傍線部を媒介としている。そしてそこに和歌も伴ったため、熊野の旅と関係のない38が配列されたのである。広本系一番歌「いつなげき」が21となっているのも、この移し変えの際に生じたと思われる。

このような現象は、津の国難波で詠まれた110にも認められる。この和歌は広本系では吉野・熊野の旅を終えて帰京する途

次での詠とされており、四国へ渡る前に記された110の詠歌事情とは全く異なっている。おそらくこれは108、109が江口遊女との贈答歌であることに起因し、距離的に近い地名を有する場面をまとめた結果であろう。もっとも佳吉の詠である51は広本系での位置と変らないので全てを移し変えているわけではない。しかしながら寛永本には、関連するものをまとめて整理しようとする傾向があると思われるのである。

広本系なら三度目の帰京で語られる娘の出家が、二度目の帰京に移されているという構成の変化も右の例と同じ姿勢によるものではないだろうか。広本系での二度目の帰京が都の貴顕との贈答歌で終始することに比べれば、娘の出家は遙に緊張感のある場面である。広本系では三度目の帰京以降は旅がなく、娘の出家と西行往生という二つのクライマックスは並立することになる。その二つが分けられることにより寛永本では、一度目の帰京に西行・西住の肉親との再会、二度目の帰京に娘の出家、三度目の帰京に西行往生の場面がくることになる。各場面が『西行物語』において西行の人生の大きな節目であることを勘案すれば、寛永本は整然とした構成を持っているということがわかる。寛永本での構成の変化は錯簡などではなく、意識的なものと考えられよう。寛永本は増補省略とともに、内部の要素を離合集散させることでより整った西行伝を目指したのではないだろうか。

おわりに

以上、寛永本について考察を加えてみた。寛永本に増補・改変の著しいことは確かだが、物語がもたら持っていた西行像までは変えていないようである。仏教的色彩が強くなっていることは、歌人としての西行の後退は意味していない。それは寛永本に新たに和歌が増補されていることから明らかであろう。場面の移し変えの手法からもわかるように、寛永本への変化は、あくまで広本系『西行物語』の枠内でのものである。逆にいえばそれだけ『西行物語』の元来持っていた構築性が強かったために、そのような改変にならざるを得なかったということになるだろう。

注

- (1) 久保田淳編『西行全集』（日本古典文学会）による分類。
- (2) 本文は嶋中道則氏「『澹庵歌話』—解題と翻刻—」（『国文学研究資料館調査研究報告』6 昭和60・3）による。
- (3) 文明本・久保本本文は『西行全集』による。
- (4) 以下、西行歌の本文と歌番号は『西行全集』、その他の和歌は『新編国歌大観』による。
- (5) 以下、諸經典の引用は「大正新脩大藏經」による。
- (6) 本文は渡辺守邦氏「法華直談私類聚抄—解説と翻刻—」

- (「国文学研究資料館紀要」7 昭和56・3)による。
- (7) 『西行の研究』百二十四頁(東京堂 昭和37)。
- (8) 『西行とその周辺』百二十九頁(風間書房 平成元)。
- (9) 伊藤嘉夫氏「西行物語のたねとしくみ」(「跡見学園国語科紀要」12 昭和39・3)参照。

末筆ながら、貴重な資料の調査・翻刻を御許可いただいた、  
慶応義塾大学附属図書館に篤く御礼申し上げます。

(やまさき・じゅん 本学大学院博士後期課程)